

教えて、バイトリダー!

イーベル

日々アルバイトに励む貧乏高校生入江圭はクラスメイト黛玲子に憧れている。自分が彼女とかかわれるはずもないと思いついていた彼だったが、彼女がバイト先の喫茶店で働くことが発覚。彼は、教育係として彼女を指導することに！

だが彼は知らない。その裏で展開される女同士の戦いを……。

謎多き優等生であると拗らせ高校生の青春、ジョブ&スクールラブコメディ！

目次

君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

08	07	06	05	00	04	03	02	01	00	
⋮	⋮	⋮	⋮	 X X 1 ⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
74	66	57	50	44	35	25	15	4	1	1

君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

00

憧れのクラスメイト、まゆずみれいこ 黛玲子のことを僕は何も知らない。

腰まで伸ばしている黒髪が特徴的な優等生。容姿端麗頭脳明晰。彼女以上にこの言葉が似合う人間を僕は同世代で見ることがなかった。勉強では上位一桁から退いたことがない。夏までは水泳部で、休み明けの朝礼では少し気だるそうに表彰台に上っていた。顔立ちも整っていて、少し鋭い目つき、すらりとした鼻と柔らかかそうな唇。この間読んだ雑誌のグラビアに混ざっても決して見劣りしない。

強いて文句の付けるとすれば授業態度が悪いぐらいで、よく窓際の席でばれないように居眠りをする。目を閉じて静かに呼吸をする。ただそれだけなのに、黛玲子がすると絵になってしまう。よく思わないのは教師ぐらいだ。逆に僕はそういう瞬間を何気なく目にする、なんだか得をしたような気分になる。

1 君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

そんな断片的な情報ぐらいだった。好きな食べ物とか、音楽だとか趣味だとか彼女のパーソナルな部分はなかなか見えてこない。

それは同じ部活の水泳部に所属していた人間でも同じようだった。比較的距離が近い人間ですら箸にも棒にも掛からないようなら、僕なんかは余計にノーチャンスだ。このまま彼女のことを知る機会を与えられないままなのだろう。眠い目をこすって授業中にチラ見する程度の距離感のままなのだろう。そういう覚悟はできていた。

だから今、バイト先のダグアウトで彼女らしい後姿を見た瞬間、こんなに動揺している。別に話したわけでもない。正面から見たわけでもないけれど、制服のポケットに入れた手が湿っているのがはっきりと分かった。

やけに響く店長の声。いくつか質問をしているのが分かった。多分採用面接をしている。

でも彼女はアルバイトなんてしなくてもいい人間のはずだ。両親が何をしている人なのかは知らないけれど、噂では大きな家に住んでいて、使用人だって雇っていると聞いた。だから僕みたいにその日暮らしのために働く必要なんてないし、お小

3 君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

遣いのためになんて俗っぽい理由もあまり考えられなかった。

つまり、さっき見た人影は疲れのあまりに見てしまった幻覚だ。そう信じて、僕はプラスチックのトレーを持ってホールへと足を向ける。その途中でピンポンと呼び出し音がした。

他の店員に目配せをして自分がそのままテーブルへ向かう。尻ポケットから注文を受け付けるハンディ端末を手にお客様と目を合わせた。

「お待たせいたしました。ご注文をお伺いいたします」

マニュアルをなぞる薄っぺらい言葉と機械的な笑顔を張り付けて、今日もモノクロな一日が過ぎていく。このまま週の過半数をバイトに費やし、妹たちのわがままに答えて、帰ってきた母の愚痴を聞いて……多分、惰性で就職をする。きつとつまらない大人になっていく。そんな人生の設計をぶっ壊してくれる何かを期待するけれど、そんなことはあるはずもないって、時間が過ぎるほど、そんな風に確信する。

「ご注文は以上でしょうか？」

お客様にそう確認して、僕はハンディ端末を閉じた。

机に上半身を預けて、うとうとしながら朝礼が始まるのを待っている。徐々に人が集まってざわめき始める教室。この時間は思う存分に気が抜けて僕は好きだった。けれど、平穩はいつの時代も長く続かないもので、自分の前髪が何者かにかき上げられる。日光が当たって顔をしかめた。こんな悪戯をしてくる奴は一人しか思いつかない。うっとおしいと思いつながら目を開けた。

「ひっでえ目つき、今日も相変わらず眠そうだな。ケイ」

「ヨツ」と陽気な声の直後に椅子を引く音がした。バスケット部所属の坊主頭。筋肉質で羨ましいほどの背丈を持つ。常に女子から熱い視線を送られる男だった。

眠い目をこすって上半身を起こす。こいつが来たということは朝練を切り上げた後で朝礼まであと少しなのだろう。伸びをしてから彼の顔を見た。

「まあな。昨日もバイトもあったし」

「ここんところずっとだな。そんなに稼いで何が欲しいんだ？」

「別に。うちは貧乏だからな。小遣い出ないんだよ」

ついでに言うなら生活費も怪しい。うちは母一人、子三人の火の車で絶賛回転だ。わがままな双子の妹は中学に上がったばかりだし、母も会社員をしているとはいえ、無理は利かない。だから僕も立派なバイト戦士として立ち回らなければならぬ。眠気はその代償と言えた。

「そっか、大変だな。俺も冬に短期バイトしないと」

「なんか欲しいものでもあんのか？ お前は小遣い貰ってただろ」

確かそれなりに家から支給されていると聞いたはずだ。正直、すごく羨ましい。自分が思春期の数時間を生贄にして手にした賃金を身内だからと言って簡単にポンと渡される環境が。無いものをねだっても仕方がないことは分かっているのだけれど、そう簡単に割り切れない。

「んや、交通費と食費にほとんど消えてな」

「交通費はともかく、食費って……あの家から持ってきてるデカイ弁当箱はどうしたよ。ごはん数リットルとおがずがアホみたいに敷き詰められてる奴」

身体作りの一環として彼らバスケット部にはタッパーが部活から支給される。それに大量の米とおかずを敷きつめることが義務なのだ。あれを食べるのはなかなか

骨が折れそうだった。

五十嵐はぺろりと舌を出して親指を口元に添え、どや顔を決めてこう続けた。

「ああ、あれは……早弁で消える」

「一日何カロリー摂取してんだお前は」

「今更数える気にもならないな」

こいつと同じ家計簿をつけるのは絶対に遠慮したい。多分ハゲる。食費だけでいくらかかるんだろうな。

そんなことを考えていると、がらりと教室の扉が開く音がした。時間は八時二十五分。朝礼きっかり五分前。この時間に規則的に表れるのが彼女、黛玲子の特徴だった。一年、二年と同じクラスだけれど、記憶にある限りではこの時間を逃したことはない。

黛は誰にも目をくれることなく真っ直ぐに自分の席へと向かう。クラスの男子がほとんど彼女に目を奪われている。このまま視線を「どうでもいい」と言わんばかりに受け流して、席について気だるそうに窓の外を眺める。それが彼女のルーティンだった。

でも今日はそれが乱れた。波形にノイズが入ったみたいに一部分だけ行動が変わった。ちらりと、僕のことを見た。たったそれだけのことなのだけれど、ここ二年彼女の行動を見続けていた僕から言わせてもらえば、それだけでも驚きの行動である。それだけ彼女の行動は規則的だった。意図が見えた。今の行動にはそれが見られなかった。それは何故だろうか。考えても答えは出ない。

「ケイ、じろじろ見すぎ」

軽く頭にチョップが入った。五十嵐がにやにやと僕を見下ろしている。こいつには僕が黨のことが気になっているのは知られていた。彼と過ごしたのは高校に入ってからなたかだか一年強だが、それだけ僕は隠し事をできないタイプだった。

「相変わず好きだよな。お前」

「……悪いかよ」

「別に。ただ、怪しまれても知らねーぞってだけ」

「それは、まあ……確かにそうだな」

妙に納得してしまう。彼女の視線は自分に対する警戒の表れだとしたら頷けるものがあつた。そうでなければ彼女の行動に説明がつかない——いや、僕の視線を感じ

取って警戒って、エスパーかよ。余計説明できない。

予鈴よれいが鳴った。五十嵐が「じゃあな」と自分の席へと引き上げていく。黛は窓際の席で遠くを眺めていた。いつも通りだ。やっぱり、あれはただの気まぐれだったのだと思う。僕の後ろでクラスメイトが何かしていたのかもしれないし、気になる物音がしていたのかもしれない。はたまた僕の勘違いで、彼女は別に僕なんて見ていなかったなんてこともありあえる話だ。だとしたら僕は自意識過剰すぎるな。

ため息を一つして、自分の脳内での審議に決着をつけた。それから入ってきた担任の話聞き流していると限界を迎えた。意識がゆっくりと落ちていく。

▼ 「おい、起きろ。入江！ おーきーろ！」

机が揺さぶられる。意識がはつきりとする。その声は普段もつと遠くから聞こえてくるからだ。数学の先生が近くで直々に僕を起こしに来ていた。

バツと体を起こして先生と向き合う。小太りの中年体系の彼は意地の悪い笑みを浮かべていた。こういう時はたいていらくでもないことを考えている。それは他の生徒が彼の餌食になっているのを見て把握していた。よりにもよって数学で寝たら

ダメだろうに……。

「ようやく起きたな。昨日はさぞ熱心に夜中まで予習をしていたと見える」

してない。ギリギリまでバイトをしていた。というかそれを知っていて言っているのだろう。まあ教師になるような人間からすれば学生の本分である勉強を放ってバイトをする、なんて行動が許せないのだろう。いや、単純に僕のが気に食わないだけかもしれない。

「でも、それで授業中寝てしまつては駄目だろう。ちゃんと成果を発揮してもらわなければな」

「はあ……」

「黒板に書いてある問いの二番をお前に解いてもらおう。いいな！ ……つたく今日は居眠りが多くて困る」

そう言つて黒板の近くへ戻るとパイプ椅子に腰を掛けた。軋む音が派手で、怒っていることをそこまでわざとらしく表現したいのかと腹が立つ。まあ、寝ていた僕が悪い。全面的に。

仕方がなく席を立ち、ひそひそと話を続ける同級生の間を縫つて黒板の前に向か

う。問一の場所には既に生徒がいて、それが黨であることは一瞬で分かった。ほんの少し足を止める。

別に気まずいとかそういったことはない。けれど、彼女と意図的に近づくとするのは初めての試みだった。多分初めてアイドルの握手会に行く感覚に近い緊張感が僕の中にはあった。

「どうした？ 入江、早くやらんか」

「は、はい」

先生に促されて、前に出た。自分のした失態と、黨の近くにいるという緊張感がごちゃ混ぜになって訳が分からなくなる。とりあえず、問題。問題を解かないと。僕は白のチョークを手に取りうとして、自分の近くにはないことに気が付いた。全てが黨の近くにある。彼女は今背伸びをしながら書いているから、黒板と体の隙間はあまりない。

手を伸ばせば接触することは間違いない。無言で取るのは気が引けた。でも、声をかけるの？ あの黨玲子に？ 僕が？

悩んでいると彼女が背伸びをしながら僕の方を見た。近くで見るとまつ毛が長

かった。

「何？」

他の人すべてを突き放すような冷たい声色だった。キッと睨む目つきに気圧される。まあ、そうか。問題も解かないで自分のことをじっと見られていたら誰だっていい気はしない。

だからその理由をきっちりと話すことにした。失敗しないように一呼吸を置いて、彼女を見る。

「ごめん、いや、あの、その……えーと、チョーク、チョークが取りたくてさ」

いや、そこまでもることないだろ。バイト先でもここまで緊張して言葉が出こないなんてことはないのに。これじゃ日本語ネイティブかどうか疑われる。

けれど、黛はそんなことを気にしていないようだった。

「チョーク……ああ、なるほどね」

彼女がちらりと視線を落として三本まとまっているチョークを見た。そのうちの一つを引き抜いて僕に手渡した。

「ん」

「どうも」

軽くお辞儀をして受け取った。問題に目を向ける前に先生の貧乏揺すりが目に入った。そんなにプレッシャーをかけないでくれよ。頼むから。そんなに僕が賢いわけじゃないって先生だってわかっているでしょ？ 時間をくれ、時間を。

えーと。これはどうやって解くんだ？ 予習なんてしてないし、授業も聞いてなかったんだから分かるわけもない。「わかりません」とも言いにくいしな……。どうしたものかと、左手で頭をかいた。仕方がない。わからないものはわからないんだから怒られてでも素直に――

「入江君」

ぼそつと黛がつぶやく。目線は黒板のまま、考えるふりをして僕にだけ聞こえるようにしてくれている。聞き逃さないようにチョークを手に持ったまま意識を向けた。

「私のが例題の復習。解き方の参考にして。それと、六乗は三乗の二乗だから。それじゃ」

一行の問題に一行の回答。その言葉を残して彼女は立ち去っていく。いや、情報

量少な。そりゃあ六乗は三乗の二乗だろうけどさ。で、肝心の問題は……

$$(1) x^3 - 8$$

$$\parallel (x-2)(x^2+2x+4)$$

これも情報量が少ないけど、とりあえず因数分解をしているのは分かった。黛の口ぶりからして僕の問題も因数分解。で、僕の問題は？

$$(2) a^6 \cdot b^6$$

……いや、6ってなんだよ。2までならわかるよ。中学レベルだしさ。6？
6って6でしょ？ 本当に因数分解できんのかこれ？ 貧乏揺すりの音が激しくなってきたしさ……本格的にまずいぞ、これは。

どうする？ 諦めるか？ いや、待て。さっき黛はなんって言ったっけ？

「六乗は三乗の二乗」だろ？ あのとときは理解できなかったけれど、黛が無意味なことをいうわけがない。きっとこれもヒントなんだ。とりあえず変換してみるか。

$$(2) a^6 \cdot b^6$$

$$\parallel (a^3)^2 (b^3)^2$$

……ああ、分かった。これ、中学レベルだったのか。やっと黛が言っていたアド

バイスを理解できた。確かに一言で言うなら「六乗は三乗の二乗」だな。答えは、

$$\parallel (a^3 + b^3) (a^3 \cdot b^3) \text{だ。}$$

チョークで解答を書き終えて席に戻る。わずかに舌打ちが聞こえて、そのあとに解説が始った。首の皮一枚で乗り切ったことにホッとして、黛の方を見る。彼女も僕を見ていた。目が合ったのはこれが三度目、微笑んでいるのを見たのは初めてだった。

15 君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

購買で丸ごとソーセイジ、それから自動販売機でコーヒーを二つ買った。一つは微糖でもう一つはブラック。僕はコーヒートをブラックで飲むことはほとんどないけれど、黛は食後に好んで口にしていた。僕はこの昼休みに彼女に話しかけるつもりだった。

さっきまで緊張に緊張を上塗りしたみたいな態度だったのにいったいどんな風の吹き回しだと、五十嵐は笑うかもしれない。けれど、これはちよつとしたけじめみたいなものだ。本当に自分が困ったときに助けてもらったのだから、何かしら対価があつてしかるべきだと僕は思う。テレビの中の正義のヒーローだとかはそんなものを求めないだろうけれど、彼女は一般の、どこにでもはいないが女子高生だ。ちよつとしたご褒美ぐらいあつてもいいと思う。

……なんて、それっぽい理由を並べてみたけれど、本音を言ってしまうえば僕は修正をしたい。彼女にとっての自分の印象を最悪なままにしておきたくなかった。ほとんど話したことのない僕たちだけれど、このままかわることなく消えてしまう

関係性かもしれないけれど、それでもほんの少しでもいい思い出にしておきたかった。誰だって最後の思い出が自分の失態だなんて嫌だろう？ 少なくとも僕はそうだ。

さつきはテンパっていただけ。本気を出せば僕だってもう少しまともに話せるんだから。そう自分を奮い立たせて階段を上り、まばらな人影の隙間を縫って自分の教室へと足を踏み入れた。窓際では今日も彼女が小さな弁当箱を広げている。

今朝の彼女の足取りをトレースしながら、最初の一言を考える。なるべくスマー
トにコーヒーを渡せて、なるべくかっこよく、そのままスムーズにお礼が言えそ
うな言葉……となれば言うべきことは一つだ。缶コーヒーをテーブルに置いて、彼女
を見る。

黛はなめらかな黒髪を揺らしながら不思議そうに僕の方を見た。近くで見ると肌
がきめ細やかで綺麗だった。正装が必要な場所にジャージで入ってしまったような
緊張感が僕を支配して、つい早々と口を動かしてしまう。

「お嬢さん、食後のコーヒーはいかがですか？」

いや、まだ飯食ってんだよ！ この馬鹿!!

かつてないスピードで脳内からバッシングがフィードバックした。正直、さっきの黒板にいた時よりも冷や汗がすごい。今すぐ背中を見たい。たぶん汗でぐっしょりでインナーが透けて見えるだろう。

彼女のきょとんと、呆氣にとられたような表情。それが僕のメンタルにダメージを与える。心をサンドペーパーで削られているみたいない気分になった。

「おっ、なんだ？ ケイの奴とうとう自爆特攻したか」

五十嵐、聞こえてるぞ。お前後で覚えてろよ。いや……分かってる。悪いのは僕だ。全部僕が悪い。五十嵐の言いたいことも分からなくはない。許せないけれど。ああ、性に合わないことをするものではないな、ホント。人生はチャレンジだっ
て言ってる奴のこと一生信用できなくなったわ。

周囲がざわめき出す。黛が昼休みに今まで誰かに誘われたことは一度もなかった。人気がないからではない。誰もが遠慮するというか、高嶺の花すぎて近寄りがたいのだ。故に周囲の驚きは当然だった。……まあそれ以上に僕のアプローチが斜め上過ぎて飽きられているというのもある。というかそれで間違いない。

もういい。ここまで来るともう印象の修正は不可能だ。僕と黛の貸し借りの清算

だけでいい。缶コーヒを手放すと机と缶がこすれる音がした。

「……さっきのは、その、忘れてくれ。それと、一限の数学は助かった。ありがとう」

もうまともに黛の顔を見ることができない。あの無垢な表情が自分への嫌悪を現すものにならなくなってしまった。

一方的に言うだけ言って、自分の席へ向かった。伏せていた視線を上げると自分の席の隣で五十嵐がニヤニヤとしているのが見えた。ああ、これはしばらくネタにされること間違いなしって感じの雰囲気だった。憂鬱な気分のまま、タイル一枚分進む。これが自分の出した勇氣にふさわしい結末なのだと思ひ締めた。ほんのちよつと泣きそうになる。

そしてブレザーの裾が引っかけたようにその場にとどまって、五十嵐をはじめとしたクラスメイトの表情が変わった。

「待って」

誰の物かわからない「馬鹿な、ありえない……」というつぶやきを僕は鮮明に記憶した。自分の気持ちをそのまま引き出したみたいなきセリフだったからだ。

裾を掴む手は普段は机上を超えて動くことはない。昼休みにあの声を聴くことはない。そのすべてが自分に向くことは絶対にない。自分が世界に勝手に置いていた仮定。それがすべてぶち壊された。

その振り返ると黛は僕の顔をなめるように眺めて、それから頷いた。何に納得したんだよ。

「入江君、お昼一緒にどうかな？ これからでしょ？」

彼女が一瞬何を言っているのか分からなかった。字幕が全部カタカナで再生されたみたいだった。数秒の間を置いてようやく彼女の言葉を理解する。

そして、混乱して気を配れなかった周囲の視線も感じ取れるようになった。男女入り乱れて鋭い視線が突き刺さる。

「せっかくだし、食後のコーヒーに付き合ってもらえるかな」

そんな周囲を気にも留めないで彼女は僕に返事を急かした。冷えた缶を手首のスナップでフリフリとして今か今かと待っている。

「そりゃあ、もちろん。願ってもないけれど……いいの？」

「いいって、何が？」

「いつも一人で食べてるからさ」

多分これは誰もが聞きたかつただろう。さっきまで針のむしろだった周囲の空気が弛緩する。

「今日は機嫌がいいからね。たまにはこういうのだって悪くはないよ」

逆に機嫌が悪い日は一緒に食事をしないわけか。ということは普段は年中機嫌悪いのだろうか。ちょっと心配になる。

「じゃあ、決まりだね。そこ座りなよ」

空いていた椅子に腰を掛け、ビニール袋から丸ごとソーセージを取り出して封を切った。中身を一口かじって、微糖の缶コーヒーを口にした。それ以外に何をしていいのかわからない。そんな僕を見かねてなのか彼女が先に口を開いた。

「入江君はコーヒーが好きなの？」

「まあ、それなりに。微糖しか飲めないけど」

「そうなんだ。意外だね。何となく、見栄張ってブラックとか飲んでそんな気がしたんだけど」

口に含まれていたコーヒーを吹き出しそうになるのをぐっところえて、そっぽを向

いて咳き込んだ。確かにそんなことをしていた時期はあった。小学生ぐらいのことだが、あの時の自分は何よりも大人に憧れていて、早く大人になりたいくて、ガキのくせにブラックを買ってそのたびに中途半端に残したものだ。思い出したくなかった記憶だった。

「おっと、大丈夫かい」

「大丈夫、少しびっくりしただけ」

「そっか」

一足先に弁当を食べていた彼女は昼食を終えて、弁当箱を重ねて片付ける。それから僕が置いた缶コーヒートのプルタブを起こした。

「逆に聞くけど、黛は見栄を張っていつもブラックなのか？」

「そういう風に見える？」

「いや、そうは見えないけど」

「けど？」

「聞いてくる奴の大抵は見栄張って飲んでるくせに他人の見栄を暴きたい……みたいな。そんな気がする」

この会話のタイムラグ。虎の尾を踏んでしまった感じ。自分のミスを感じた瞬間だった。せっかく窮地から脱したのに、僕って奴は……。恐る恐る黛の顔を覗く。でも彼女の表情は自分の想定とずれていた。

「……あたり。ちよつとビックリしちゃった」

驚きと関心が入り混じったような感じ。帰ってきた言葉の温度に安心感を覚える。どうやら虎の尾は踏んでいなかったらしい。

「最初は、見栄だったし。今は……味と見栄が半々かな」

「意外と子供っぽいところもあるんだな。黛も」

「何それ。私たち未成年だし。別に子供っぽくていいんじゃないかな」

「それもそうか」

でも、そういう考え方はなんとなく大人っぽいなと僕は思った。子供だから子供らしく、大人だから大人らしく。僕にはない思想だ。どうしても背伸びがしたくなってしまう僕からすれば考えられなかった。

「やっぱり黛は、しっかりしてるな」

「そうかい？ そんなことはないと思うけれど、どうしてそう思うのかな」

「どんなことにもちゃんと、答えを自分なりに創ってる気がする。それこそ数学みたいに」

さっき助けてもらった時の事を思い出しながら彼女のことを表現する。彼女は自分と明らかに違う。常に芯が入っているように、行動指針がぶれない気がする。そんな真つすぐさに僕は心打たれていた。……今日はなんだかブレまくりなきがするけれど。

薫が缶コーヒーを一口含んで目を閉じる。十秒と少し間を取った。会話の間に挟むにははずいぶん長い間だった。再び彼女と目が合う。

「……理由がないことは嫌いだからだよ。曖昧なものは好きじゃない。だから自分の中はなるべく具体的にしておきたいだけ」

彼女の言葉をかみ砕く間もないままチャイムが鳴った。「そろそろ準備しなきゃ」と呟く。気まぐれで起きた最初で最後のチャンス。それがもうすぐ終わりを告げる。その前に、聞いておきたいことが一つあった。

「薫」と彼女の名前を呼ぶ、彼女は「なに？」と振り返る。

「じゃあ、さっきは、どうして助けてくれたんだよ」

「さあ、どうしてでしょう」

おとぼけたように彼女は言う。意外と悪ふざけもできるたちらしい。彼女のこれまでの振舞いからすればありえないことだが、今日だけで彼女の印象がどんどん変わっていく。

「……勿体ぶるんだな」

「そのうち分かることだから別に焦ることないよ」

「そのうちって具体的には？」

「内緒」

シーって自分の唇に人差し指を当てて、黛は自分のロッカーへ向かった。その背中を追いかけることは時間的にできそうにない。周囲の視線に耐え、自分の支度をしておいた残りの五限と六限。その間ずっと、彼女に伏せられてしまった理由を考え続けていた。

かみんぐすーん

「おい、入江どうということだよ」

クラスメイトの一人が声をかけてきた。夏休みが明けたというのに彼の名前を未だに憶えられていないことが申し訳なかった。

「どうということって、何がだよ」

「昼のあれ！ 黛に話しかけてたじゃないか」

それは僕が理由が聞きたい。あれだけ会話に bad 判定が付きそうなミスをかましておいておきながら、結果として彼女と楽しく会話をできてしまった。それが不可解でならない。

彼を皮切りに、他のクラスメイト達が男女入り乱れて近寄ってくる。したことがない体験にうろたえて、ヘルプを五十嵐に求めようとしたけれど彼は部活に一直線。もう教室には居ないことを失念していた。

「何か弱みを握ったのか？」

「握ってない！」

「私にも紹介して」

「紹介できるほど仲良くない！」

「じゃあいったいいくら貢いだんだよ」

そうだそうだと詰め寄るクラスメイト達を目線で制した。俺をなんだと思ってる。バイトをしているからと言ってお金持ちってわけではない。何なら俺よりもお前達の方が黨に貢げる環境下にいる。それに、俺の稼いだ金はそんなつまらないことに使われていると想像されたことに腹が立った。

周囲の反応が芳しくないことを察する。ああ、やつちまった。接客業に従事する人間としては失格の反応だった。落ち着けば冗談の類だと分かるだろう。店長が見ていたら間違いないとやされる。一呼吸して気持ちを落ち着かせた。

……僕の時間だって無限じゃない。当然のことながら限りがある。出勤時間までのカウントダウンはもう始まっている。だから適当なことを言ってこの場から逃げることにした。修正するのも面倒だし。どのみち彼女らの望む答えは持ち合わせてない。

「悪い。今のは無し。まあ、強いて言うなら……」

「強いて言うなら？」

「貢ぎ先は学校近くの山の上の寺。賽銭箱に五円。ゲン担ぎも案外馬鹿にできないな」

「それじゃ」と歩き始める。

何か言いたそうな声を漏らすクラスメイト達だったけれど、僕が一クラス分程度に離れるともう追ってくる気配はなくなっていた。

階段を下って、下駄箱のスニーカーを手に取る。つま先で床を二度叩いて、校舎から出た。ブレザーのポケットに入れていたスマホが振動する。

出勤直前の連絡は確認しないと面倒なことが多い。客の入り方によっては急がなければいけないことだってある。念のため足を止めて電源ボタンを押した。

『駐輪場で待つ』 黛

黛、僕の記憶にある限りでは一人しかもっていない苗字だった。でも僕は彼女に連絡先を教えていない。クラスのグループにも彼女は誘われていなかった。

名前だけ変えたクラスメイトのいたずらか、はたまた、今日の昼の光景を見た何者かによる逆恨みからの報復か。どちらかはわからないけれど、用心するに越した

ことはない。ただでさえうちの学校では自転車に張るステッカーに本名を書くことを義務付けられている。特定は容易なのだ。今のご時世ではこの校則に疑問を抱くけれど、修正には至っていない。

屋根の下の駐輪場。自分の自転車を陰から眺める。そこには荷台に腰を掛けて、退屈そうに両足をぶらぶらとさせている黛の姿があった。まさかの本人であるとは流石に予想していない。今日はエンカウント率が明らかにアップしている。それこそ世界に修正が入ったみたいだった。

彼女がこちらに気が付いた。

「遅い」

淡白に彼女は心情を吐露した。彼女にしては分かりやすく、少し眉間にしわが寄っていた。それを収めるために落ちいて接する。

「ちよっと捕まっていたんだ。それに約束なんてしてなかったし、連絡に気が付いたのはついさっきだ」

「じゃあ隠れてたのは？」

「……果し状が送られてきたのかと思ったから」

不思議そうな顔をして、ポケットからスマホを取り出してちらりと見た。

「……流石に手短に打ちすぎたね。これは私が悪かった」

彼女が荷台から降りて、僕のママチャリが晴れて自由になる。このままバイトに直行したいところだけれど、僕は彼女に呼びつけられている。このままサヨナラというわけにもいかないだろう。

「それで、何の用事？」

「答え合わせをしようと思って」

「答え合わせ？ 何の？」

「私が内緒にした話」

彼女が内緒にしたこと。僕が五と六限を費やした問いかけ。理由のないことが嫌いな彼女が理由もなく自分を授業中に助けた理由。僕はまだその解を導くことができていなかった。正直気になっている。僕以外のクラスメイトも聞きたがっているに違いない。

「ちなみに、正解すると私が貰えます」

「冗談でも他の奴にそんな言い方をするなよ。後悔するぞ」

「入江君に言ったから後悔はさせないってこと？」

「そういう言葉遊びは今してない」

黛は頭の中が愉快なんだな。話してみるまで分からなかったが外面とのギャップがものすごい。そんなところを知っているのはたぶん自分だけだと思うと得をした気分にはなる。……頭は痛くなるけど。

バイトにまで歩いていける程度には余裕がある。ちょっとぐらいは付き合ってもいい。

「まあ、良いよ。答え合わせしようか」

「それじゃあ本題にさっさと行こう。問い…私はなんで入江君に話しかけたでしょうか」

「さっぱりわからない」

「答え合わせをしようとか言っておいて、諦めが早すぎないかな？」

「別に早くない。そうだな……黛は条件の出ていない証明問題を解ける？ 僕から見れば黛の考え方は難しいよ。ほとんど話したことだってないんだから」

彼女について僕が知っていることは外面と内面の差があまりにも激しいことぐら

い。それだって決定打にならない。何ならむしろ混乱してしまっている。

「そう……じゃあ、条件を追加していいこうか」

「……条件ね」

なんだか話が長くなりそうだ。

「歩きながらでもいいか？ この後用事があるんだ」

「それは構わないよ」

彼女は頷いてそれから隣で人差し指を立てた。

「条件一、^{いち}当然理由がある」

「なきゃ問題にならないだろ」

一発目から突っ込みどころが満載だ。まともに解かせる気はあるのだろうか。こっちはそれなりに気になっている。おちよくられただけとかだったらしばらく立ち直れそうにない。

「次は？」

「そうだね……条件二、動機は昨日生まれている」

心当たりがない。昨日はバイトで誰にも会っていない。

「まだ駄目だ。次」

「それでは条件三、私は連絡先を……おっと、これは答えになっちゃうね。やっぱりなしで」

彼女は濁したけれどその先は予測できる。連絡先を入手した方法だろう。気になってたことだ。彼女はいつたいどうやって僕の連絡先を知ったのだろうか。しかもそれは、今回の彼女が僕に係ることに決めたことに直結しているらしい。

校門を跨ぐ。ついでに黛に尋ねる。

「黛、家はどっちだ？」

「家にはまだ帰らないから大丈夫。しばらくはついていくよ」

「そうか。じゃあ次の条件」

「はいはい。続いて条件四——」

彼女の告げる条件が数を増していく。そのどれも気になるところをギリギリよけるもので彼女の言う理由にいまいち結びつかない。

その間に学校前の坂を下って、橋を渡って、砂利道を歩いて、条件が九つを数えたあたりで目的地の喫茶店『三島コーヒー』が見えてきた。入り組んだ住宅地に潜

むこの店は、近くの間人からはそこその需要がある。結局、彼女の問いの答えがわからないまま、店の目の前についてしまった。

「ごめん、僕はここで。バイトだからさ。続きはまた……」

「うん時間切れだね。じゃあ、最後にもう一つだけ」

彼女が僕の勤務先の喫茶店を指す。

「条件十、私たちは同じ場所に向かっている」

彼女の言葉は自分が昨日見た人影が幻でないことを意味していた。昨日の面接は幻じゃなかった。彼女が朝、ちらりと僕を見たのは気のせいではなかった。自分の想定にすべてチェックマークが付けられていくようだった。

「ということ、今日から同じバイトとして働くことになりました」

「嘘だろ……」

「嘘じゃないって。ほら、バイト先のグループにも入ってるし……って聞いている？」

「

カメラ越しに話しかけるみたいに彼女が手を振った。まるで現実が画面の向こうに行ってしまったみたいだった。この戸惑いに折り合いをつけることができるのは

たぶん相当先になる。そう確信した。

混乱したままの脳内ではあったが、更衣室に入ると自然と体が覚えている動きをしていた。制服からロッカーに入れておいた制服に着替えて、それから入れっぱなしのワックスで自分の前髪をどかした。朝は整える時間がないからそのままだけれど、バイトの時は多少手間だがこうすることになっている。目が隠れたままというのは接客をするうえであまりよくは思われたいし、コンプレックスの一つである鋭い目つきだっただけではメリットだ。なんて言っただけで変な客に絡まれなくて済むからな。

小さな鏡で出来栄を確認してから、ロッカーのカギを閉めてそれからダグアウトに顔を出した。店長が事前に言ってあったのか、何人か人が集まっている。その中心にはもちろん黛がいて、バイト用なのか髪を後ろで縛ってポニーテイルにしていた。「お疲れ様です」と適当に挨拶をすると形式通りの『お疲れ様です』が返ってくる。

「うん、じゃあこれで今日はこれで全員だね」

店長こと三島さんが頷く。誰よりもここの制服が馴染んだおじさまといった風情の男性だ。

ここに居るのは黨を入れて四人。どうやら僕が最後だったらしい。この店はそれほど広いわけじゃない。平日にこれだけの人数がいれば十分に回ってしまう。むしろ黨が新しく入ったからそれだけ余裕を持っているのだろう。

「今日から新しく入ってもらう黨さん。軽く挨拶をよろしく」

「はい。黨玲子です。入江君と同じ高校で、クラスメイトです。精一杯やりますが、初めてのバイトで、わからないことだらけなので、いろいろと教えてください」

よろしくお願ひしますと頭を下げる黨。僕ともう一人のアルバイト、山川はぱちぱちと軽い拍手をした。彼女は我先にと手を挙げる。

「じゃあ入江は放って置いてもいいね。私、山川！ 下の名前は美しい海と書いて美海^{みう}。美海ちゃん、よろしく！」

バツと明るく自己紹介。眼鏡とお下げが特徴の山川は僕らと同じ高校二年生。通う高校こそ違えど年が同じだから比較的やりやすい部分があった。

「よろしく、山川さん」

「おっと、つれないか。芯の強い女を連れてきたな、リーダー」

山川が肩に手を置いてくる。僕は「いいや」と首を振った。

「連れてきてないよ。僕だってさっき聞いたんだ」

「へえ、それは運がいいのやら悪いのやら……」

含みのある言い方をする山川に「どうして？」と黛が問う。

「だってこんな見つけにくい場所で働くのって、見つかりたくないか、サボりたいかのどっちかでしょ？」

「……山川君？ 後でちょっと話があるんだけど」

「おっと、いっけね。店長、冗談です。三島カフェジョークだから、これ」

「……ならいいけどね」

店長がふとため息をつく。山川はそれなりに要領がいいけど、そういうところがある。店長も手を焼いているのだろう。

「話を戻すけど、知り合いがいる方が楽って人もいるし、逆もまたあるじゃない？

レイちゃんはどうだよ」

人差し指で黛を指さした。客の前でもやりそうだなとちょっとひやひやする。て

かレイちゃん？ いきなりあだ名かよ。クラスでの黛を見ていないからできる芸当だ。黛との距離の詰め方グランプリ初代王者に輝ける速度だった。

普段の黛は奥手。こういうタイプは苦手かと思った。心配ではあったが、特に気にした様子はない。普段通りの彼女は顎に指を添えて少し考えて、それから発言をする。

「んーどっちもどっちかな。でも、入江君が前髪を上げてるのを見たのは良かったかも」

「ん？ どういうこと？」

山川が僕を見る。自分のだらしない部分だから、あまり積極的に言いたくはない。けれど別に隠すことでもないから答えることにした。

「学校だと前髪下ろしてるんだよ。昔から朝はダメでな。準備できないんだよ」
「へえー、意外。夜だとしっかりしてるのに」

「だからこっちに來てビックリしたの。学校でもそうしておけばいいのに」
「早起きができたなら考えておくよ」

適当に返事をした。多分、考えることは一度もない。間違いなく早起きできない

からな。

話が一区切りしたところで店長が二回手を叩いた。そろそろ仕事を始める意思表示だろう。

「じゃあ仕事をしようか、山川君はホール。入江君は黛さんに簡単に仕事を教えてあげて」

「教えるのは店長じゃなくていいんですか？」

「入江君なら大丈夫だ。山川君が教えるならともかくね」

「その言い方は山川が傷つきますよ」

「山川がそうやって自分で言ってるうちは大丈夫だな」

「ぶー」

山川はふてくされながらズカズカとホールへ向かっていった。店長も厨房へ引き上げていく。それから僕は簡単なことから黛に教えた。注文の取り方、お客さんとの接し方。店長へのオーダー伝達、その他もろもろ。彼女はやっぱり呑み込みが早くて、二週間もすれば僕と同じぐらいの仕事ができるようになるように見えた。

客が掃けて、バイトも終わりに近づいた頃。僕たちは皿洗いを終えて、食器を拭

いていた。厨房には二人だけ。店長と山川がホールへ出ていて、やけに静かに感じた。

沈黙に押しつぶされそうで、少し苦しい。僕は耐えきれなくて、打開策をとって気になっていたことを一つ彼女に聞いてみることにした。

「あのさ、黛はどうしてバイトをしようと思ったんだ」

「どういうこと？」

「志望動機だよ。店長になんて言ったのかわかってさ」

黛がバイトをする理由。昨日、面接をしていた彼女を幻と断定していたのはそれが思いつかなかったからだ。仕事をしている間、自分の中にずっとあった引っかかりを解消しておきたかった。

黛は少し言いにくそうにそっぽを向いた。てっきり話してくれないと思った。皿を拭くこと二枚分のインターバルを挟んで、彼女は一度深呼吸をした。

「……私、苦手なんだよね。人と話すの」

「そんなようには見えなかったけどな」

「気を使わなくてもいいよ。学校だといつもそうでしょ？」

確かに、普段の黛は無口だ。今日だけで去年聞いたセリフの文量をはるかに超えている。そう思うと彼女は今無理をしているのかもしれない。

「いけないとは思ってたんだけどね。なかなか、治せなくて」

「それで、バイト？」

「まあ……そんなところ」

うしろめたさがあったのかゆっくりとした声だった。

「すごいな。黛は。僕だったらずっと隠し通すよ。治したいだなんて思えないと思う」

普段下ろしている前髪と隠している目つきのことを思いながら、僕は言う。

「頑張れよ」

「そうだね、まずはお客さんとちゃんと話せるようになりたいな。ちょっと失敗しちゃったし」

確かに注文確認で噛みまくってたのを見たな。でも僕の方がもっとひどかった気がする。かっこ悪すぎて言えないけれど。

「その点入江君はすごいよね。注文もばっちりだし。なんだろうね。物怖じしない

「というか、胆力があるというか……。ほら、今日の昼なんかも——」

「頼むからそれだけは忘れてくれ」

そのまま二度と思い出さないで欲しい。黛は首を傾げた。

「なんで？ 参考にできると思うけれど」

「あれは参考にしたら絶対にダメだ。悪い例の筆頭だよ。ちゃんとしたものを見たほうがいい。ほら、店長なんかはいい例だ」

あの落ち着いた佇まい。この店が変な立地でも保っているのはあの人が成す人徳のおかげといってもいい。黛に抱く憧れとは違う憧れが、あの人にはあった。

でも黛は首を横に振る。長い黒髪が揺れた。

「確かに店長さんは良い人だとは思うけれど、レベルが高すぎてちょっと」

「まあ、それもそうか」

「だから、私は入江君がいいの」

彼女が今朝、数学の授業中に見せたような笑みを浮かべる。今日はやけに目があう日だった。自分とは対照的なきれいで、大きくて引き込まれるようなそれに僕はすっかり魅了されてしまったと言ってもいい。

食器をしまい終えたタイミングで差し出された手。それに触れるかどうかすごく迷った。けれど比較的あっさりと下心に負けた。暖かくて柔らかい、仕事をあまりしていない手だった。

「だから、これから私にいろいろ教えてね。リーダー」

「勿論。頑張ろうな、研修生」

プロローグ、了

00 | XX 1

昔の夢を見た。初めて家出をした日のことだった。きっかけはあまり覚えていない。自分にとって何か耐え難いことが起きたのだとは思う。

十月十五日。夏休みも明けて一月経ひとつきったところのことだった。その日は縁日で、自分の家の近くでも人がたくさん集まっていた。

二階の自室から見た楽しそうな人たち。それが今の自分とは対照的で、自分もそうなりたと思った。だから貯金箱の中身を財布に詰めて、ベランダに置いてあったサンダルを履いて、二階の窓からこっそりと外に飛び出す。

最初のうちは周りの雰囲あ気^あに中てられて楽しかった。家族ではこんなところに来たことはなかったから。ヨーヨー釣り、リング飴、焼きそば、にぎやかな屋台とそれに並ぶ人たちを眺めて、スルーした。あの時の私の目的はただ一つ。袋いっぱい詰まった綿菓子^{わたあめ}が欲しくて仕方がなかったのだ。

どこまでも続くように思えた横並びの屋台を進んで、私は綿菓子を探す。けれど、それがすぐに見つかることはなかった。私は次第にムキになって走り出す。ペ

タペタと音が鳴るサンダルが装備として頼りなかった。

結論を言ってしまうえば、私はどれだけ奥に行っても綿菓子を買うことができなかった。それどころか、人がいた場所から外れ、ただ風が吹く音がする暗がりへ移動していた。

少し離れた場所にもあるかもと深堀し過ぎたことにその時になって気が付いた。さーっと体温が急激に下がっていく。

能動的に自分の家から出ることがなかった私にとって夜は不安の象徴だった。暗い場所は怖い。自分がどこにいるのかもわからない。そういった自分ではどうにもならない無力感が幼い私を支配していく。

サンダルが石ころに引っかけた。バランスを崩して、私は思いっきり転んだ。こんなことなら家出なんてしなれば良かった。自分はさっきまでいた人達に近づきたかっただけだった。自分とは対極で常に楽しそうにしている人たちの真似をしたかった。そんな小さな望みさえ叶わなかったという事実には耐えられなかった。私は、久々に泣いた。

「おい。大丈夫か？ 随分と派手に転んでいたみたいだったけれど」

やや高い、学校でも聞くような幼い声。その声につられて顔を上げるとヒーローのお面を少しずらして被った男の子が私のことを見ていた。立っている場所から見て自分とは反対側方向から来たみたいだった。

「……へーき」

「んな泣きそうな声で……いや、泣いてるな」

「泣いてない」

裾で雫をぬぐった。強がって彼を睨んだ。きっと彼は反論する。小学生は何かにつけて白黒つけたがる。ついでに言うなら、自分の思っていることがすべて正しいように押し付けがちだ。そういうところが苦手で私はクラスに馴染めていなかった。

「じゃあ我慢できたんだな。多分俺なら泣いてる」

だから彼の言葉が染み入るようだった。私が求めているものに近かったのだと思う。少年は自分よりも随分と大人に見えた。立ち上がると右膝がじりじりと燃えるように痛む。私は表情を崩して、彼はその意図を汲んだ。

「どっか擦りむいたか？ 絆創膏あるからさ。見せてみるよ」

「……膝がちよっと」

「そうか、じゃあそこにちよっと座れよ」

彼に促されたとおりに近くにあったベンチに腰を掛けた。青色のプラスチックが軋んだ。彼は背負っていたザックからプラスチックのケースを取り出して、私の傷を見るや否やいきなり消毒液を浴びせた。私は思わず声を漏らす。

「っ……痛いんだけど」

「ごめんごめん、もう終わるから」

そう言って彼は消毒液をコットンでふき取って大きめの絆創膏を私の膝に張り付ける。テレビで放送されている魔法少女の柄だった。

「うっし、おっけー。よく頑張ったじゃん」

「……別に」

「そっぽ向くなよ。いきなりやったのは確かに悪かったよ。機嫌治せて……あー
そうだ。綿菓子食べるか？」

ほら、と彼がザックから取り出した。またしても魔法少女物のパッケージ。彼の
チョイスは謎だったけれど、私はそれに釘付けになってしまふ。

何せそれは自分が探しても探しても見つかることができなくて、途方に暮れて諦めようとしていたものだったから。

「おっ、反応いいな。じゃあ一緒に食べようぜ」

「……いいの？」

「俺がいつて言ってるからいいの」

彼は袋を開けて自分が先にちぎって綿菓子を口にした。それから私に袋を差し出す。私は彼に倣って袋の中の綿菓子をちぎって食べた。

夢にまで見たそれは、俗っぽいチープな塊だったけれど、今まで食べた何よりもおいしい気がした。

「これでお前も共犯だな」

「共犯？」

「これ、妹用のお土産だったからさ」

「……じゃあ食べちゃダメじゃない？」

「そ、だから絶対に誰にも言っちゃダメだ。約束だぞ」

「わかった」

私が頷くと、大きな破裂音がした。暗かった周囲が月明かり以外のものでも照らされる。彼の笑顔が薄くピンクに光った。視線を空に向けると、光の束がばらまかれて見えた。

「ここからでも花火見れたんだな。知らなかった」

「私も」

自分がどこにいるのか分からない癖に彼に頷いた。さっきまでの気分が嘘みたいになって、じんわりと暖かなものへと変わった。私はその温もりを忘れられない。見知らぬ少年と見ながら食べた綿菓子のお味を忘れられない。たぶんあの体験は私にとって本当に必要なものだった。あの時、彼に貰ったやさしさで、今の私ができる。

だから、夢に見るたびに思う。いつか、あの嫌いな両親に頼らなくてもよくなったら。自分を、自分自身で保てるようになったら。もう一度だけ彼に会いたい。そして綿菓子を半分に分けて、あの景色を眺めるのだ。

自己満足で、無謀であることは十分に理解している。けれどそれが十七歳の私が抱く、進路よりも大事な夢だった。

黛がバイトに来るのは今日が二回目だった。彼女が自分のバイト先の制服を着ているのには未だに慣れることはない。名札の横には若葉マークが添えられていて、でかかど『研修中』の文字が躍っている。休憩中の店員が控えるダグアウト。机の対面に座って、じっとこちらを見る黛はやはり学校とは少し雰囲気異なる。それだけ彼女が精力的に仕事に取り組もうとしているということなのだろう。

そんな彼女に僕は職場の先輩として、一応は教育係として、苦手分野である接客について教えることになっていた。

「さて、黛。じゃあ早速だけれど、店員として一番大事なのはなんだと思う？」

「大事なこと……うーん。愛想の良さとか？」

それも大事なことだろう。あるに越したことはない。ただ、それが一番かと言われると少し違おうと僕は思っている。

「悪くない答えだと思う。確かに愛想の良さは武器だよ。山川を見ていると良く分かる」

机の上でぐでーっと伸びていた山川はこの話を聞いた途端に背筋を伸ばす。それからキリッと表情を凜々しくして見せる。なんだか少し腹が立った。ちょっと鼻をへし折っておこう。

「見ての通り、軽薄なふるまい、適当な仕事ぶり、距離感の近さなら店内一だ」

「ちょっと、ちょっと！ そんなこと言わないで！ 真面目印の山川で売ってるんだから！」

「ついに取り繕うのも上手いと追加しておいてくれ」

「わかった」

「わからないで〜」

山川は再び上半身を机に預けると憎らし気にも僕を見た。そんなににらんだって前のサボり癖への抗議はやめる気はないぞ。僕はどれだけフォローに回ったか覚えてないからな。

「いきなり休憩時間に何を始めるのかと思いきや山川弄りですか？ おいおい、すねるぞ！」

「めん……いや、悪かった」

「今めんどいって言いかけたよね!？」

そういうところだぞ、山川。お前の面倒な所は。ただ、このまま放って置くのはもっと面倒なので適当な所でフォローを入れることにする。

「冗談はさておき、山川は愛想がいい。明るい接客は客としても悪い気はしないし、とげとげしい態度の相手を丸め込めたりする。仕事ぶりには見えて安心感がある。この店における愛想の良さの見本だな」

山川が胸を張る。ちよろいなこいつ。横目で見て、黛は僕に問う。

「じゃあそんな風に愛想をよくするためにはどうしたらいいのかなのかな？」

「いや、僕は別に黛に愛想良くなって欲しい訳じゃないぞ」

手を横に振って否定する。黛と山川は首を傾げると「何を言ってるんだろうね」と言いたげに目を合わせた。まあ確かにこれだと伝わらないか。言葉を付け加えることにした。

「愛想の良さって結構ハードルが高いんだ。できる奴はできるけど、できない奴はいつまでたってもできない。僕も別に愛想がいいかって言われると、そうでもな

い。むしろ悪い部類に入る」

「そうだね。リーダーは時折人を殺す目で客見てるもんね」

にやにやと笑いながら山川が仕返ししてくる。まあ、さっき弄ったからな。報復は仕方がない。ただ……そんな風に見られてるんだ、僕。そこまで言われるとちよつとへこむな。

すんなりと受け流すことは難しいが、何とか話を継続させる。

「……そんなこともあつて愛想の良さ以前に求められるものが、この仕事にはある」

「愛想の良さ以前……それは？」

「挨拶、それから真摯な受け答えだな」

なんだか拍子抜けしたみたいに二人がこちらを見た。なんだよ、本当に大事なんだぞ、これは。先代のバイトリーダーも口酸っぱくして言ってたからな。

「意外とこれができない奴が多い。特に初めてだと。愛想良く、とか。いろいろと考えすぎて、ハードル勝手に上げて緊張して、全部ダメになるのが一番良くない。初日の黛はそんな感じだったよな」

「……そう、ですね」

「なんで敬語？」

「思い返して反省してる」

しょぼんとする黛を見るとなんだか傷口に塩を塗っているみたいな気分になる。意外とそういうの気にするのか。たぶん会話に失敗したら脳内で反省会開くタイプだな。

「喫茶店での接客にそこまでは求められていない。さっき言ったことと、注文通りに商品を運んでくること。それさえできていればホールで働くスタッフとしては上々」

「そういうもの？」

「そういうもの。慣れたら徐々に愛想の良さとかにも気を配ると良い。逆に慣れるまでは配るな。多分どっちつかずになるから」

「わかったよ」

黛が頷く。ぐっと握った拳がかわいらしい。気合は十分なようだ。

「これで九割九分のお客様はこれで対応が効くからさ。じっくり物にしていこう。幸いここは人も少ない職場だ。たぶんクビにはならない。ここままで何か質問は？」

はい、と静かに黛が手を挙げる。僕は「どうぞ」と手を出して許可を出した。

「ちなみに残りの一分は^ぶ何？ どういうお客様なの？」

「まあ、具体例を挙げれば、面倒なクレーマー、あるいは日本語が通用しないやばい奴だな。お客様は神様とも言うけれど、あいつらは崇り神だ。そういうのに関しては僕や、山川を呼べ」

「呼んでどうするの？」

「気に触れないようになだめるか、最悪、さっさと祓う」

「いやリーダー言い方……まあ、そういうところあるけどさ……」

ため息をつく僕と山川。お互い崇り神には良い思い出がない。思い返すだけで呪いの本が一冊書けるだろう。書きたくないけれど。

入店を知らせるチャイムが鳴った。誰が行くかと目配せをする。

「山川はまだきゅーけーちゅーでーす」

ひらひらと手を振る。まあこいつが一番休憩に入るのが遅かったのは確かだった。僕はハンディ端末をポケットに刺して、席を立つ。

「わかった。なら僕が行く。黛、見本を見せるから、しっかり見てて」

ダグアウトから出て店の入り口へ早足で移動する。人が少ない店内を歩き。その途中で見たボブカットとポニーテールの二人組を見た。見慣れ慣れていたシルエツト。他人の空似と聞いたかった。けれど、ギラリと死神の持つ鎌のように上がる口元で僕は確信する。中学二年と三年のじゃじゃ馬姉妹が家庭だけでなく職場にも押し寄せてきたのだと。

舐められたら終わる。いや、このくそ生意気な二人に対して小さなプライドが頭を下げることを許さなかった。気が付けば僕は反射的に口を動かしていた。

「いらっしやいませ、お客様二名ですね。店外へどうぞ」

「入江君!？」

あっ、いっけね。

「おいおい兄ちゃん。いくら客が勝手知ったる身内だとしてもよおー。その態度はないんじゃないの？」

「そうだね。私も和己かずみちゃんの言うとおりでと思うな。お兄さん、たとえ私たちが相手でも外面はよくしておかないと。誰に見られているかわからないんだから」

静香は「ねえ？」と陰から見ている黛に視線を送った。こいつら確信犯だ。後ろから黛が付いてきていることをしっかり見ていたらしい。本当にたちが悪い。思わず奥歯をかみしめた。

双子の妹和己かずみと静香しずか。ボブカットで荒っぽい口調が和己。ポニテのお淑やかな口調の方が静香だ。共に今年になって中学二年に上がったばかりの十三歳。女バスの入江ツインズとしてここら一帯の中学生からはよく知られている。……主にガラの悪さで。

男性顔負けの身体能力。悪知恵もよく働く。それらは主にバスケットで存分に有効活用され、あまりのヒールっぷりに対戦相手のトラウマになったりもする（らし

い)。

もしも彼女らが部活に入っていないなかったのなら、この余ったエネルギーがどこへ向かい、どうなってしまったかは分からない。けれど、絶対にくるくなことにはならないと確信できる。まあ肉親としては想像したくはないが。

さて、そんな仮定の話はともかく、現実の話をしよう。今僕は二つのプライドを天秤に掛けなければならぬ。

一つ、家族としてのプライド。

兄として、妹たちに偉そうに命令されたくない。これは妹、弟を持つ人間ならば理解してもらえと思う。兄は下の兄妹にはマウントを取られたくない。兄や姉という生き物は生きた歳月の長さの差分だけ、妹や弟に逆にマウントを取りに行きたいもの。

理屈ではない。生まれ持っている感覚。あるいは性質。年を取るにつれて丸みを帯びることはあれ、これは絶対に覆せないものなのだ。

まあ、逆に妹や弟はそれらを生意気と一蹴したくなる生き物だというものなのだが、それは置いておこう。

二つ、従業員としてのプライド。

僕もこの店に来てからそれなりの期間働いて、それなりに授業員や店長からの信頼を勝ち得てきた。先ほど黛に話したように接客の丁寧さ、真摯さには一言ある。……少なくとも店内では。苦勞して積み上げてきたものを溝とに捨てに行く真似はしたくなかった。それに今は黛がいる。彼女に対する教育者として、情けないところは見せたくなかった。

脳内天秤が揺れている。感情ベースでは一つ目に、理屈では二つ目へと傾きが変わっていた。どちらにするべきか決め手が無い。どちらを選んでもそれなりに後悔はしそうだ。僕が眉間にしわを寄せて考えていると、いつものようにお氣楽な声色のあいつが眼鏡とお下げを引っ提げて、ホールに戻ってきたのだ。

「おっ、カズちゃんにシズちゃんじゃん。いらっしやい」

「よっ」と手を挙げる山川。それだけでうちの妹たちは釘付けになる。

『やまちゃんだー！』

声をそろえてトテトテと近づいて抱きついた。「おっ、可愛いやつらめ」と山川はそれに応じていた。山川はうちの姉妹となぜか仲がいい。どのようなきっかけが

あつたのかは知らないけれど、相性がいいのは確かなようだった。

普段であれば『飲食店の店員に気軽に抱きつくな』と説教をかますのは間違いない。だが、ぐっとこらえた。何せ僕は今ピンチ。山川の出現は渡りに船だ。このまま奴らを押し付けて、山川の動きを悪い例として、黛に紹介する。こうすればさっきの僕の件も悪い例として片づけられるという寸法だ。まさに完璧。勝ちしか見えない。

妹達の後ろから山川に視線を送る。後は任せたと『どうぞどうぞ』のジェスチャーを送った。彼女はウィンクで答える。何それかわいい、山川のくせに。

「ところで山ちゃん後ろの子は？」

和己が尋ねた。

「ああ。レイちゃんとは初遭遇だよ。昨日から来たんだよ」

山川は「ね？」と黛に視線を送った。

「初めまして、黛玲子です。お兄さんにはお世話になってます」

黛は山川に応じて軽くお辞儀をした。静かに、和やかに、名で体を表さないうちの妹たちに格の差を見せつけるような仕草に思わず見とれてしまう。

それはどうやら妹たちも同じだったようで、反応が少し遅れた。

「……これはご丁寧に。私は静香、こっちは和己です」

「おう！ よろしく」

元氣よく和己が答える。家にいるときみたいにならなくてもけんか腰ってわけではな
いらしい。意外と温和だった。その辺は中学生になって成長しているのかもしれない。
い。

「ところで山ちゃん。レイちゃんは研修中なんだろう？」

「そうだね」

「兄ちゃんが昔言ってたけど、誰かが教育するんだよね？ それは誰がやってる
の？」

「それは……」

山川がちらりとこちらを見た。僕はとっさに両手を合わせて彼女を拝む。そこから
導かれる妹たちの行動がなんとなく察しがついたからだ。何とかこの場は逃して
欲しかった。

山川は微笑み、僕の願いは聞き入れられる。そのことに安堵した。

「勿論バイトリーターである入江圭君に決まってるじゃない」

「や、山川でめえ！」

「おっと、そんなに怖い目で睨まないで」

「兄さん、あんまり山ちゃんをいじめないでください」

口元を袖で隠しながら静香が言う。絶対ににやけているのがわかった。

「ということは兄ちゃん、新人相手にちゃんとした接客、見せなきゃあいけねえよな？」

「そうですね。和己ちゃん。お兄さんはお客である私たちに、お手本として、きちんとしたおもてなしをしなければいけませんよね？」

ズイズイと僕に詰め寄る二人。こうなるともうどうしようもない。僕の天秤は粉々に碎かれ、悩んだが故にどちらのプライドも守ることができないようだった。観念した僕は店内に手を差し出した。店員としての矜持で自分を奮い立たせる。

「二名様、店内へどうぞ」

「よろしい。好きな席に座る！」

我が物顔で席に進む妹たちの頭の上から山川が見えた。にやにやと笑いながら黛

の肩を持っている。

「ほら、ああいう真摯な受け答えが、接客には重要なんだよ」

「そうなのかな」

「そうそう。よく見てなっつて」

山川……お前絶対さっきの弄り根に持ってたな。いや、確かに悪かったとは思っただけだよ。そのあとフォローして帳消しにしたじゃん……。それで許してくれよ。報復があまりにもデカすぎるんだって。

妹たちが席に腰を掛けて、持っていたスクールバックを空いている椅子へ置いた。それを見計らってマニュアル通りのセリフを述べる。

「ご注文お決まりになりましたら、そちらのボタンでお知らせください。ではごゆっくりどうぞ」

立ち去ろうとして背中を向けた。けれど、ピンポンと鳴り響く音と、目の前のディスプレイに表示された番号でそれが背後の席からであることが分かった。とことんまで僕の神経を逆撫でたいらしい。

「……何か、御用でしょうか？」

「だから、怖いよ兄ちゃん笑顔、笑顔」

「そうですね。兄さんは見本なんですから、しっかりしないと」

あきれ顔で静香が言う。今すぐ僕がその顔をしたい。こんなことをされて腹が立たない奴がいたら人間として間違っている。

「兄ちゃん、このままじゃ黛さんが不真面目な店員に育つよ」

それは困るな。黛にはちゃんとした目的があつてこの場で働いている。可能なら僕はその手助けになりたかった。いくらイレギュラーな客とはいえ、言い訳にはしなくなかった。

こほんと咳払いをした。

「何か御用でしょうか」

「お腹にたまる店員さんのおすすめの食べ物二つ。飲み物とセットで」

「ではこちらのミックスサンドとソイラテのセットはいかがでしょうか。当店でも女性人気が高いメニューですよ」

「では、それで」

「かしこまりました。他にご注文がありましたらボタンでお知らせください」

ハンディ端末に注文を打ち込んでから礼をして立ち去る。少し奥まった所で待機していた黛と山川が見えた。僕はそれにすぐさま合流する。

「あれ、出禁にできない？」

「リーダー、弱音を吐くのが早いって。もっとルーキーに良い所を見せなきゃ」

「いや無理」

本当に無理だって。矜持とか言ってられない。

限界ぎりぎりの僕に代わって山川が注文された品を運んで行った。遠くから見ると相変わらず彼女らは仲が良さげで、山川は砕けた態度で応対をしていた。妹たちもそれを咎めることはない。というか僕にあれだけ言うておいて山川は許容範囲なのかよ。乙女のルールは良く分からない。

「入江君に妹がいたなんて知らなかった」

横に立っていた黛がそう言った。「言ってなかったからな」と僕は返す。昨日まで僕と彼女は話す機会がなかったのだし、当然のことだと思う。

「私は一人っ子だから兄妹って羨ましいよ」

「そうかな？ いたらいたで面倒だぞ、兄妹って。何かにつけて突っかかってくるし。今日だってそうだったろ？」

僕はちらりと黛の目を見た。黛は首を少し傾げる。

「それはお兄ちゃんの立場から考えればそうかも。でも、可愛いと思うけどな」

「ええ？ 可愛い要素どこにあったよ」

「お兄ちゃんかまって欲しいんだなーって思うとなかなか可愛いよ」

お兄ちゃんにかまって欲しい妹。まあ、確かに言葉だけを切り取ると可愛い気もする。けれど、あの姉妹を見たうえで出てくる感想がそれとは黛は少しズレていると思った。

「だから、私からしたら入江君が羨ましい」

「あんな妹がいるのが？」

「うん。まあ妹でも弟でも、お兄ちゃんでもお姉ちゃんでも、誰かもう一人いてくれたらって思うときがある」

目を細めて彼女はテーブルを見た。視線の先にいる山川と妹達。それは黛にとって一種の憧れなのかもしれない。僕があんな妹がいない生活を望むように、彼女だってあんなやかましい妹がいる生活を望むのだろう。

その理由を考えて自分なりの答えを彼女に投げつける。

「黛は寂しかったりするの？」

「ん？ どうしてそう思うの？」

「あれだけやかましい妹を羨ましいって思う理由がそれぐらいしか思いつかなかっ

た」

「ああ、なるほどね」

相槌を打つだけ打って、黛は少し間を置いて考える。瞳を閉じて一呼吸を置いてから答えを出す。

「……そうだね。多分、寂しかったんだと思うよ。小さい頃は特に」

「そっか、じゃあ貰っていくか？　うちの妹。言ってくれば日当たり二千円で派遣するけど」

「うわ、守銭奴だ」

くすくすと黛が笑う。僕としては無料でもいいから持って行って欲しい。

「でも第一希望はお兄ちゃんかな。私は入江君みたいにかまってくれるお兄ちゃんが欲しいよ」

「え、僕？」

自分が指定されてしまったことに驚く。正直に言えば自分はそのままで良い兄ではないと思う。でもそれを判断できる材料が黛にはない。だから真っ先に兄として僕が候補に挙がったのだろう。

「入江君は日当たり二千円でお兄ちゃんになってくれるかな？」

「僕を雇ってどうするんだよ。別に面白くもなんともない」

「そんなことないよ。入江君が来てくれたら妹として思いっきり迷惑かけて、怒らせて、ゲラゲラ笑ってさ。最後にお母さんにまとめて怒られるの」

「……僕は絶対嫌だな、それ」

つい想像して口に出してしまう。経験があるだけに黛の望みを否定してしまいたかった。自分が発端ではないのに怒られるというのはなかなかに応えるのだ。まあ、今にして思えば同調してしまった自分も悪いのだというのは理解できなくもない。けれど、納得できるまでには時間が必要だった。

「でも私は入江君の雇い主だから、従ってもらえないと」

「拒否権ってあたりする？」

「ないよ。仕事ってそういうものでしょ？ 雇われるならきっちりしないと」

「それはそうだけど、あんまり理不尽なことを要求されると応募しないって」

「それもそうだね」

黛が頷いた。

「とういふか、そもそもなんでそんなことをしたいんだよ」

「なんでだと思ふ？」

「……分かんないな。そんなことをしたくなる気持ち」

「うん。多分入江君には私の気持ちは分からないと思ふ」

黛がきっぱりと断言する。僕はそこまで女の子に対しての気遣いができる方ではない。もし気を遣えたのなら、もう少し山川からの反撃も少なくなっているはずだ。自覚はしている。けれど黛に言われると少しへこむな。

「そうだな。悪い」

「別に良いよ。分かって欲しいなんて思っていないから」

突き放すように彼女は言う。その言葉にはちよつとした諦めのようなものが混ざっている気がした。それがなんとなく嫌だった。

「僕は知りたいよ。黛のこと」

自分が抱き続けていた想いを吐露する。彼女と話すようになるずっと前から思っていた本心は思っていたよりもすんなりと口にできた。

黛の笑みが崩れた。驚き、うろたえているようにも見える。彼女の本心が覗けた

ような気がして僕は嬉しくなった。

黛が首を左右に振る。崩れた表情を普段通りの彼女に戻す。それから「どうして？」と僕に問う。

彼女のことを知りたい理由。自分の中では答えは定まっているのだけれど、それをはっきりと直接的に伝えるにはやっぱりまだ気恥ずかしかった。

「仲良くなりたいから。せっかくバイトもクラスも一緒だし」

「そっか。……ありがとう」

黛が「ありがとう」なんて言った理由は分からなかった。もし、少し未来で彼女と僕が仲良くなっていたら聞けたらいいと思う。

「あれ？」

妹たちが占領していたテーブルをちらりと見ると、いつの間にか姿を消していた。山川がダダグアクトに引き上げて来ていて、僕らは彼女を見る。

「山川、あいつらは？」

「カズちゃんとシズちゃんなら、さっきお会計を済ませて帰ったよ」

「そっか、やっと楽になるな……」

どうやら僕は会話によつぽど集中してしまっていたらしい。厄介な妹たちが姿を消すのも気が付かなかつたぐらいに。でも、正直ほっとした。

帰ってくれたのは大変嬉しい。けれどももう一回ほど何かしらの攻撃を加えられると想定していただけになんとか拍子抜けだった。

そう思っていた矢先に山川から「はいこれ」とプラスチックの板を手渡される。

「なんだこれ。伝票？　僕は今日客じゃないし、賄いも頼んでないぞ」

「まあそうだね。リーダーは頼んでないね」

裏返すとミックスサンドとソイラテの文字が並んでいる。そこで僕は山川の行動の意味を理解した。

「まさかとは思うけどさ、これ僕に払えってことか？」

「いや『支払いは兄で！』って言われたから」

ノリノリで妹たちの真似をする山川。イラっとして伝票を思わず机に音を立てて置いてしまった。

「許可を出すな！」

「だって財布ないって言われたから。しょうがないじゃん？」

「しようがないじゃない。お客として対応を求めるなら支払いをきっちりしていくべきなんだよ！」

それが最低限の客としてのマナーであると僕は思う。というか僕以外の人も多分そう思っているはずだ。というかそうであってくれないと困る。妹たちはどこで育ち方が歪んだのだろうかと僕は頭を抱えた。

僕の場合はふつつつと沸騰寸前。それをなだめるようにして山川は言う。

「まあまあ、良いじゃん。リーダーの稼ぎからしたら可愛いもんでしょ？」

「可愛くねえんだよ！」

本当にうちの妹たちは可愛くない。可愛いと思える女性陣の気持ちは理解できない。もし僕が妹たちを可愛いと思うときが来たのなら、それはたぶん天変地異の前触れとか、死に別れる寸前の走馬灯ぐらいの物なのだろう。

「ありゃあ、兄ちゃん相当入れ込んでるぜ」

帰り道、薄暗くなった路地で和己ちゃんが呟いた。私も「そうだね」と同意する。私たちは今日「コンパス」としてあの場に出向いた。お兄ちゃんの気持ちがどこに向いていて、それがどれぐらいの規模なのかを判断する指針。その役割はしっかりと果たせたと思う。

私たちだって伊達に兄妹を十数年やっているわけではない。お兄ちゃんがどうすれば怒るのかその境界線はきっちりわかまえている。今日はそのラインを意図的に超えたつもりだった。けれど、お兄ちゃんのラインは普段よりも随分と後ろに引かれていた。そうでなければ夕飯にありつけないまま店を追い出されていたはずだ。

というか一度追い出されたことがある。だからお兄ちゃんがない日にしかあの店には足を運んでいなかった。

お兄ちゃんには我慢しなければならぬ理由があったのだ。従業員としてのプラ

イドとか、家族の中での力関係だとかそういうのを度外視して優先しなければならぬ理由が。それは一つしか考えられない。

「黛さん、ね。確かに綺麗な人だったけど、何がそこまでお兄ちゃんを引き付けるんだか……。私にはさっぱり」

「静香ちゃんがお手上げてなるとアタシにはどうしようもないじゃねーか。しっかりしてくれよ」

「無茶言わないで。まだ情報が少なすぎる。お兄ちゃんの口からあの人のことなんて一度も出てきたことがあった?」

「そりゃあ、そうだけだよ」

和己ちゃんがふてくされて道端の小石を蹴った。荒れたアスファルトの上を不規則に転がるそれは私たちの混乱を示しているような気もした。

それがなんだか嫌で、私の前に転がってきたタイミングで思いっきり蹴る。側溝の溝へ吸い込まれるように転がって落ちていく。

「……お兄ちゃん、どうしてあんなよく分からないポツと出の人を好きになっちゃったんだろう」

経緯も理由もさっぱりわからないままに呟く。こと恋愛においてお兄ちゃんは衝動的には動かない。基本的に考えに考えて、行動が遅れて、かっさらわれるまでがテンプレートだった。今回のお兄ちゃんの変化は何が何でも急すぎた。私たちの経験則をはるかに超えている。

上を向いて考え込んでいた和己ちゃんが私の方を見た。

「……騙された、とか？」

「いや、和己ちゃん。出会って数日でそこまでいくかな？」

「いや、静香ちゃん。山ちゃんがクラスメイトだって言ってたじゃん」

「……そうだったっけ？ そんな大事なピースが頭に入らないぐらい私は混乱していたらしい。」

「じゃあ、それなりに時間はあったわけだね」

「兄ちゃんがバイトしまくりの守銭奴だってことは普段見てればすぐ分かることだしな。アタシはカツアゲなんてしないけど、もしカツアゲするなら兄ちゃんをターゲットにするかな？」

「それ、お兄ちゃんをよく知らない他人の人が考えられる？」

私たちも人のことは言えないけれど、お兄ちゃんはなかなか柄が悪い。普段は前髪を下ろして誤魔化しているけれど、鋭い目つきが特徴の険しい顔はなかなか近寄りがたい。和己ちゃんのような思考はなかなか考えにくかった。

「それだけ覚悟を持って来てんだよ。本気で兄ちゃんから金絞りに来てんのさ」

「あんなに綺麗でお淑やかな人が？」

「それは、取り繕うのがめっちゃ上手いのかもかもしれないじゃん」

黛さんの姿を思い出す。あの立ち振る舞い、表情の柔らかさは同性の私としてもちょっと憧れる。彼女になれないことは分かっている。それでも、彼女のようになりたいとは考えてしまうぐらいに魅力的に見えた。

「というか静香ちゃん。あの人のこと気に入ってる？」

「まさか。……いや、でも『テレビで綺麗な新人女優さんを見つけた時』みたいな気分ではあるかも」

「あーそれはちょっと分かる。雰囲気あったもんな」

やはり立ち振る舞いは武器だ。

私になるべく丁寧に話すのは気高くいたいから。和己ちゃんが荒っぽく話すのは

舐められないため。私たちはそうやって望む『強い自分』を常に演じている。

黛さんの本心は分からない。けれども、彼女が私たちのように意図的に印象を操作しているとする。そうした時、彼女の望む『自分』は誰にでも取り入って思い通りにすることなのではないかと邪推してしまう。

「……だとしたら、絶対にあの人の思い通りにはさせられないね」

「そうだよな。だって兄ちゃんにはちゃんとした人と幸せになってもらう義務がある」

そうだ。お兄ちゃんは後ろにいる私たちのためにいろいろ捨てている。それがわからないほど子供じゃない。だからせめてそれだけはお兄ちゃんに全うして欲しかった。

「うん。だからこんな土壇場で全部ひっくり返されるなんてごめんだよ」

「そうだな。まあまずは山ちゃんをどう焚きつけるか考えないとな」

「そこが一番の問題なんだよね……」

私は呆れながら呟いて、三つ編みの彼女のことを想ってポケットのスマートフォンを握った。いい文面はなかなか思い浮かばなかった。

79 君はあの日見た花火を覚えているだろうか。

充
電
中

d
a
y
2

了

00—XX2

初めて私を思いつ切り褒めてくれた人の言葉をずっと胸に抱えている。

私は平凡な選手だった。背は高くない。足も速くない。ジャンプ力やフィジカルが隠されているわけでもない。比べられ、劣っているということが証明され続ける日々。それに私は徐々に疲れ、すり減っていった。

何のためにしているのか分からなくなった公園での自主練習。得意だった右サイドからのミドルシュート。それを思いつ切り外して、自分の気持ちがプツリと完全に切れる音がした。

転々と転がるバスケットボールを追いかけて、公園の奥へと進む。その先にいた私と同じぐらいの男の子が拾ってくれた。

でもなかなかボールを返してくれない。私は早くコートから立ち去りたいのに彼はそれを感じ取ることはない。軽くドリブルし始めた彼に苛立ちを覚えて彼に叱咤する。

「いい加減返して」

「ああ。ごめん」

慌てて彼は私に向けて下投げでボールを放った。それからもなかなか立ち去らない彼に向けて「何？」と問いかける。自分がすごくイラついているのがわかった。見知らぬ人に向けて八つ当たりをしている。そんな私が情けなかった。

「ああ……いや、随分練習してるんだなって思ってた。そこまでボールがツルツルになるなんて相当だろ。そろそろ買い替えた方がいいぜ」

「え？ ああ……うん。そうだね」

手に持っていたボールを撫でた。ボロボロで、すり減っているそれに今の自分を重ねてしまう。『もう捨てるしかない』そう言われているみたいだった。

冷たい風が頬を撫でる。私の諦めを後押ししているようだった。

「でも、これで最後だから。もったいなくて」

「最後？ やめるのか、バスケ」

「うん。なかなか上手くなれなくて。試合にもなかなか出られないから」
「なんだか自分で言っていて辛くなった。つい下を向いてしまう。」

スポーツにおいて上手くない人、期待されない人はなかなかチャンスを与えても

らえない。少ないチャンスをものにするために頑張っている、いつもミスが頭をよぎる。私の身体を縛って、本当に失敗をする。だからどうしても自分を好きになれなかった。……そんな弱々しい自分から少しでも離れたかったのだと思う。

「……そっか。でももったいないな。あんなにシュートが綺麗なのに」

目の前の彼が言う。私がゆっくりを顔を上げると彼は少し興奮気味に私を見ていた。そんな風に見られたのは初めてだった。諦めの混ざらない彼の表情。それが私を縛り付ける。

「指先の感覚がいいのかな？ フォームが多少ばらけていてもループが一定でき、見ている気持ちが良いんだよ。もっとフォームが固まったらと思うと——」

早口で勢い良く彼は言う。濁流のようなそれに私は飲み込まれてしまつて、反応を返す間もない。彼は両手を肩に乗せた。

「だから、お前はもっと上手くなるよ」

戸惑う私に彼はそう話を締めくくつた。自身に満ちた声は私にも力を分けてくれる気がした。

一方的に押し付けられるような意見は好きじゃなかった。けれど、彼の言葉は

すつと心に入り込むように自然と受け入れることができた。

自分じゃない誰かに認めてもらえること。肯定してもらえること。それがこんなにも嬉しいことだなんて知らなかった。これが私が本当に求めていたものだったのだと、生まれて初めて自覚する。私は胸にぎゅっとボールを抱えて、彼を見た。

「……本当に？」

「ああ、俺が保証するさ」

両手を挙げて「ヘイ」とボールを要求する彼にパスを出した。ボールをシュルシュルと手元でスピさせた。鋭い目つきでリングをにらむ。それから彼はつぶやいた。

『誰にだって、誰にも負けない可能性が眠っている』

擦れたスリーポイントラインから彼が飛ぶ。背丈が伸びた綺麗なフォームだった。見慣れたボースハンドとは違う、ワンハンド。ジャンプの最高点に到達してからボールが放たれる。リング当たることなく、ネットを潜り抜けた。

「これは他人からの受け売りだけだな。もっと自分を信じてやってみてくれよ。俺は、ボールをここまで使い込んだ人を他には知らないからさ」

「じゃあな」と立ち去る彼を追うことはなかった。もう一度拾った自分のボールはさつきまるで違うものに見えた。

たぶんあの経験がなかったら、私は中学の最後までコートに立てていなかったと思う。私もあんな風になりたいと心の底から願った。より強く自分を追い込んで高める努力を知った。彼が私の人生を価値のあるものに変えた。

十八歳になっても私は彼のようになれなかったけれど、彼の言葉はずっと支えにしていた。だからいつだって私は自分の中に眠る可能性を探してあがくことができている。

勿論、彼の言葉が理想論だって、本当に成立するわけではないということは分かっている。圧倒的な才能ってやつが本当に存在することを私はもう知っている。それでも、あの時の私は確かに救われたのだ。

Day 3 開幕。

どうやら私が完全に劣勢であることは間違いないらしい。スマートフォンに映る二人の後輩たちからの報告。それを見て私はロッカーでため息をつく。

想定外の刺客にして、確定的な恋敵、黛玲子。彼女の出現は私の計画に大きな影響を及ぼしている。というか、計画はほぼ白紙に戻さざるを得ない。私の計画は競合相手のいないことが大前提、じっくりと時間をかけるものだ。けれど、この状況で時間をかけてしまえば即座にかっさらわれるリスクがあった。

入江君が言うには、彼女と入江君が話し始めたのはここ数日のことだという。それが本当のことだとは限らない。けれど、数日であるの距離感を生み出せる彼女のコミュニケーション能力は脅威だ。自分からすれば魔法でも使ったのではないかと言いたくなる。

一方私はリーダーと再会してからそろそろ二年が経つ。だというのに進展はあまりない。リーダーと 話すときは常に照れくささが先行する。会うたびに自己嫌悪の連続だった。だから彼女の存在があまりにも眩しくて、妬ましくて、恐ろしい。視界の外にどけてしまいたくなる。

けれど、その衝動に従うことは私が今の私でなくなることを意味していた。それだけは嫌だった。

……話を戻そう。

彼女に入江君が入れ込む前に、何とかして私に振り向かせるようなきっかけが必要不可欠だ。そのためのイベントはもう考えてある。

十月十五日、地域の花火大会。二週間前と迫ったこの地域一帯で開催されるお祭りだ。カズちゃんとシズちゃんの情報ではリーダーは意外なことに夏祭りには目がないらしい。浴衣やゲタ、めつたに見られない装いをする同級生に心を躍らせていたとのことだった。仕掛けには絶好のタイミングだろう。ここを逃す手はない。

リーダーの趣味嗜好に合った、普段とは違う自分の姿。周りの熱に中てられながら強引に……というのは流石にできすぎだと思う。けれど、望むべき理想の姿では

ある。実行さえできれば入江君の心を私の物にできる自信があった。……実行できればだけだ。

まあとりあえずの目標は彼女に悟られず、リーダーをお祭りに誘うこと。そして何より了承を得ることだ。リーダーが素直に乗ってくれるとは思えないけれど、そこは腕の見せ所。

「絶対に私しか目に入らないようにしてやるんだから」
そう呟いて私はロッカーのカギを閉めた。

▼
朝日が差し込むカーテンに苛立ちながらも立ち上がり、眠い目をこすって弁当箱に冷凍食品と残り物を詰め込んでいく。中学生組はまだ給食があるからいいが、高校に入ってからは自分だけはこの作業にとらわれてしまっていた。

ベーコンを焼いてその上に卵を乗せた。片手間にトースターに入れていた食パンが焼きあがっている匂いがする。それにつられてやかましいのがどたどたと足音を立ててやってきた。

「おはよう兄ちゃん！」

「おはよう、和己。卵まだ焼いてるから、その間に寝癖治してこい。すっげえぞ」
「ホント？ わかった。治してくる」

その足音が遠ざかると今度はペタペタと静かな足音を立てて二人目がやってくる。彼女は顔をこすって、あくびをかみ殺しながら登場する。いつになっても寝起きは悪い。けれど寝方がいいのか、寝癖はあまりつかない。

「……おはようお兄ちゃん」

「おはよう静香。洗面所はまだ和己がいるから先にコーンスープでも飲んでろ」
「ん」

電気ケトルを手にとってお湯を入れてからパッケージの封を切って投入。逆だ逆。しかも混ぜてないし。まだ寝ぼけてんなこいつ。粉っぽいスープでむせる彼女は少し笑えた。

「お兄ちゃん何これ、粉っぽいんだけど！」

「また寝ぼけながらやってたぞ。治らないな」

「分かっているなら先に入れておいてよ！ 馬鹿！」

「だったらお前が夜のうちにに入れておけよ。分かっているんだから」

そう言い返すと彼女は納得がいかないようだったけど黙った。スプーンを持ってかき混ぜる。おい、睨んでもスープは復元しないぞ。

そう思っていると和己が戻ってくる。「またやったの静香ちゃん」なんて笑いながらトースターから焼きあがったトーストを取り出してテーブルに並べていく。僕もフライパンを持ってテーブルへと向かった。ベーコンエッグをそれぞれの皿へ盛り付けていく。「いただきます」とそれぞれが言って、バターをトーストに塗ってからかじった。

「兄ちゃん、兄ちゃん！ 今年はさ、一緒に夏祭りに行こうよ」

「嫌に決まってるんだろ」

「何でだよ。かわいい妹の誘いを一発で断るなんてどうかしている」

そのセリフ鏡見ても同じこと言えんのかよ、和己。あ、でもこいつならかわい
いって言いそうだな。口に出すのはやめておこう。蛇が出てくることが確定してい
る藪をつつきたくない。

「お前らと一緒に行くのと金づるにされるのが目に見えてるからな」

「いけないの？」

「静香、まだ寝ぼけてんのか？ いけねえに決まってるんだろ」

そんなことを平然と言えてしまうお前が心配になる。本当にカツアゲはしていないだろうか。

「だって兄ちゃん私たちの綿菓子食べたもん。それぐらい当然の代償でしょ？」

『ねー』と口をそろえて見つめあう二人。声もきれいにピツタリだ。こういう時は本当に息が合うなこいつらは。

「いつまで引きずってんだよそのネタ。ちゃんと次の年に返したろ」

「甘いよ兄ちゃん。食べ物への恨みには利子が発生してすごいことになるんだから」

「じゃあその利子いくつか計算して出してみろよ」

「それは企業秘密だよ。お兄ちゃん」

たじろぐ和己に静香が助け船を出した。多分計算はしていないだろうが、もし仮に計算するならトイチとかで計算しているだろう。ヤクザかよ。

「何か言いたそうだね」

「……別に。それより朝練あるんだろ？ 早く行けよ。時間おしてるぞ」

「そうだった。危ない危ない」

テレビの左上を見て、彼女らに忠告する。朝食を素早くかき込むと、「ご馳走様」と席を立った。自室で素早く着替えるて、鞆をつかむと『行ってきまーす』と仲良く玄関を飛び出していった。

さて、当面の危機は去った。しかしながら僕も妹達を心配しているほど余裕はない。朝食を済ませて弁当箱を鞆に入れる。ブレザーを羽織って家を出た。

いつもの通学路を自転車走り抜けていく。途中で自分と同じ制服の男女が歩いているところを追い越していく。その途中でやけに目立つ黒の長髪、その特徴が当てはまる人物は一人しかない。本来であればもう少し後ろの時間帯に登校しているはずだけれど、彼女にだって気まぐれはあるのだろう。

速度を落として彼女の横につけ声をかける。これまでだったら考えられない行動だった。

「おはよう、黛。今日はちょっと早いんだな」

「ああ、入江君おはよう。今日は早く起きちゃって」

「そうなんだ」

僕が頷くと彼女が「ところで」と前置きをする。僕をじっと見る目つきは真剣そ

のものだった。こういう彼女はなかなか見られない。

「来月の夏祭りに行かない？」

彼女から飛び出てきた言葉に大層驚いた。正直、願ってもない誘いだ。けれど僕は首を横に振った。不本意ながら。本当に渋々。

それから言葉が出てくるのに随分と時間がかかった。ちょっと待てよと。もしかしてこれはギャグで言っているのかと迷ったのだ。真剣な表情からのボケは鉄板と言えば鉄板だし。

「……ごめん、行かない」

「どうしてダメなの？」

意外だったのかきよとんと首を傾げた。なんでそんな顔をするんだろう。彼女は分かっているはずなのに。

「黛は意地が悪いね」

「私がいじわる？ どうして？」

不本意そうな彼女の表情。それを見て僕は事情をなんとなく察した。

「……十月のシフト表は見た？」

「見たよ。でも、入江君バイト入ってなかったはずでしょう？」

「やっぱり」と僕はつぶやいた。十月十五日。その日は確かに昨日まで予定で埋まっていなかった。けれど、状況が変わったのだ。

昨日の今日だ。自分が当事者では無ければ確認なんてしないかもしれない。そうなると思地悪だったのは僕だったかもしれない。

「欠員が出てな。昨日急遽ヘルプを頼まれてさ。予定もなかったし、請け負ったんだ」

「そうだったんだ」

「グループに連絡出てないか？ 『シフト表更新』って」

僕が促すと黛がスマホをちらりと見た。「ホントだ」と彼女が頷く。僕は彼女に業務連絡についてまだ教えていない。いろいろと一度には覚えきれないと思ったから、後回しにしていたのをすっかりと忘れていた。

登下校中に仕事の話をするのは気が進まないけれど、知らないとは不便なのは間違

いない。だからここらで教えておくことにした。

「グループラインには休みの連絡とか、シフトとかいろいろ店長が情報を乗せてくれるから、仕事に行く日は特に確認しておいた方がいい、ある程度状況が分かっていた方が働くのが楽になる」

「そこまで変わる？」

「結構な。『一人病欠で、ヘルプが誰も来れない』って分かったら忙しくなるのは想像がつくだろう？」

「そっか」と黛が頷く。

僕が彼女に話した例は極端だ。そんなことはめったにない。基本的にはヘルプはついてくれている。ただ、よくある例は分かりづらいのだ。『サボりがちな奴がヘルプに来るから、むしろ忙しくなる』なんて彼女にはあまり伝えたくはない。まあ、休みの日に引き釣り出されてモチベがいつもより下がるのはわかるけどさあ……普段よりもサボりに力を入れるのは止めてくれ。頼むから。

「何かあった時はここに連絡すれば、店長が対応してくれる」

「じゃあ私が体調不良で休みたいときはここに連絡するんだ？」

「そういうこと。後は店長が空いてる人員に電話かけて、出れる奴がヘルプに行く。誰が代わったかもここで分かるから。もし代わってもらったらお礼を言っておくといいよ」

「わかった。ありがとう、入江君」

黛が儂げに微笑む。ブレザーのポケットにスマホを入れた。僕は「どういたしまして」とたどたどしく言葉を返して、強くハンドルを握った。

僕は未だに黛と話すことに慣れていない。僕にとって彼女は、遠くから眺める柵に囲まれた美術品のようだった。

自分に向けられてる笑顔をちゃんと受け入れることはまだ難しい。月曜日の自分から見たら贅沢な悩みだと思う。けれど、それだけの異常さが近日は感じられていた。

「でも、残念だな。いろいろと教えて貰ったお礼に、グイイこと〴〵してあげようと思っただのに」

彼女の唇がやけに艶っぽく見えた。そういう性癖がないにしてもフェチになってしまいうるようになる。周囲の生徒がひそひそと話しているのがわかった。

それにしても何？ 良いことって！ いや、めっちゃくちゃ気になるんだけど！
遠くに見える山々に叫びたくなる。

黛に夏祭りに誘われた時点でもすごくいいことだと思うのに、プラスアルファで何かついてくるのか!? そんなの反則だろ。めっちゃくちゃバイトサボりたくなっちゃうじゃん。

「……良いことってなんだよ」

「別に、入江君には関係のないことでしょ」

「まあそうだな」と僕はそっぽを向いた。彼女がにやけているのがチラリと見えた。そっか、教えてくれないんだ。まあ一度断ったことだし、深堀はできないな。本当に惜しいことをした。スケジュールを今すぐ組み直したい。

最悪の手段としてバイトをすっぽかすなんてものもあるけれど、それは止めた。目の前で堂々とサボり宣言をするのは自分の評価を下げかねない。話を変えて、この煩惱から距離を置くことに決めた。

「そういえば、今日は僕がいない日だったけど大丈夫そう？」

「大丈夫だと思うけれど、どうしてそんなことを聞くの？」

「いや、そういえば初めてだったなと思ってさ」

「心配してくれるんだ？」

少し離れている道を眺めていた僕の視線に黛が割り込んでくる。意外とこの話題に食いつきがよくて助かった。

「まあ、それなりに。まだ時間たってないし、慣れないだろう？」

「大丈夫だって。山川さんだっているしね」

「ああ、そっか。山川もいるのか」

完全に知り合いがないわけではないわけではないなら一安心か。黛は自分から積極的に行くタイプではない。だから山川のようなタイプが一人いるとコミュニケーションは円滑に進むだろう。

「だったら居心地は悪くはないな。仕事は……忙しくなりそうだけど」

「あつ、ひどいこと言うね。山川さんに言いつけちゃうよ」

「それは勘弁して欲しい」

あいつに聞かれたら何を言われるかわからない。加えて手痛い反撃がやってきそう。僕は苦笑いを浮かべて、校門をくぐる。

「入江君、山川さんとは、長い付き合いなの？」

「それなりに長いよ。一年の時からバイトで一緒だったからな」

「じゃあ付き合いはそろそろ三年目なんだ？」

「そういうことになるな」

僕と山川はアルバイトを主軸に高校生活を送っている。だから下手したらクラスメイトよりも交友を深めているかもしれない。

「そうか。もうそんなになるんだな。腐れ縁というか、なんというか……。最初はどっちかが音を上げて、さっさとやめると思ってたんだけどな」

見ての通り山川は気が付いたらすぐに弱音吐く。それにサボる。加えてお客さんの愚痴を漏らすし、あとサボるし。でも、仕事はできるのが無性に腹立つんだよな。逆に僕は物覚えが悪い方だったから、最初のうちはフォローして貰っていたりもした。彼女がいなければ僕はここまでアルバイトを続けることはなかったかもしれない。

そういう意味では僕は彼女に感謝すべきなのだろう。

「……いいいな」

「何が？」

「働いているときの二人の阿吽の呼吸というか、アイコンタクトで通じ合える……みたいな感じが」

今度は黛がそっぽを向く。僕らの隙間を縫う風が少しだけ冷たく感じた。

「いいかな？」

「うん。信頼関係を築けているって感じがしてさ。私にはそういうの無いから……。羨ましい」

「そりゃあ、働いて数日じゃ、そうはならないだろ」

そうなられたら逆に怖い。お前は僕の何を知ってしまったんだってなる。

彼女が黙って、歩みを進めた。足音のサイクルが早まった気がする。無言の時間が続くのが息苦しくて、僕は言う。

「でも、まあ……いつかなれるって」

「本当にそう思う？」

「ああ、もちろん」

僕がそう言うとき、黛は「そっか」と呟いた。

「じゃあ、山川さんを目指して頑張るよ」

「その目標は『山川に負けないように』に再設定した方がいい。サボり魔を目指さないでくれ」

「そうだね」

黛がくすりと笑って「じゃあ、またあとで」と手を振った。僕も「また教室で」と手を振った。歩いていく黛を僕は見送る。風で揺れる黒髪がきれいだった。目に焼き付けるようにじっと見て、それから駐輪場へ向かった。



正直、想定外だ。自分の思い出と彼の記憶を結びつけるための最適解。粗削りながらも自分が組み立てていたプランがあっけなく崩れ去った。もっと早くから動き出していれば、もっと早くから気が付いていれば……。そうしたらこの状況は避けられたはずなのに。後悔しても仕方がないとわかってはいるけれど、そんなことを考えてしまう。

切り替えると自分に念じる。こうなったら今の計画を捨てて、別のプランを用意しなければならぬ。それは理解している。

けれど、考えがまとまらない。それどころか捨てなければならぬ計画がより一層輝きを増していく。多分、私はどうしても彼と一緒に夏祭りに行きたいのだ。最適解だとか、そういうのは一切関係なく。

間違ひなく険しい道になる。けれど私は自分の気持ちに嘘をついてまで最善とか、最高率だとか、そういった行動をとれない。

だったら、今のプランをどう立て直すかを考えなければならぬだろう。上手くいかなかったときはその時に考えればいい。

そしてもう一つ、自分に立ちふさがる障害がある。彼女は私が欲しい物を全部持っていた。愛嬌も、信頼も、過ごした時間と思ひ出。そのすべてが羨ましく見えて仕方がない。山川美海は私にとって完全無欠の存在だった。

彼女の気持ちの矛先がどこに向いているのかは知らない。けれど、彼の中で彼女の存在は大きなものだと確信できている。

もしも私が彼との関係を望むのなら、そのスペースを奪って、勝ち取らなければならぬ。自分が持てる武器を全て使っても。

今日の仕事が終わった。ロッカーに引き上げる途中「お疲れ様」と声をかけられる。彼とは今日初対面だったけれど、気さくに声をかけてきた。見る限りでは普段は根暗、というか暗いの人だとは思う。だけど仕事中はスイッチで完全に切り替えている。多分彼の役割がそうさせている。彼もまたバイトリーダーなのだった。

入江君もリーダーとはいえ、アルバイトという立場である。だから替えが効くようにしているというのは必然だ。リーダーが複数人いてもおかしくはない。考えてみれば当たり前のことだけれど、私はなんとなく入江君しかそういう役職にいないのだと勝手に思っていた。

「お疲れ様です」と頭を下げてからロッカーに引き上げる。制服のシャツのボタンを上から外して、冷めた空気に肌を晒す。こうしているとなんとなく水泳部に所属していた時のことを思い出す。泳ぐことが好きだった。水中に居る間だけは私は他のことを考えずにいられるから。それは私にとって何よりも大切な時間だった。だから、その場所から去る準備をするロッカーはあまり好きになれなかった。

金属の扉が軋む音がした。自分以外の誰かが更衣室に入ってきたのだ。その正体はすぐに明らかになった。三つ編みに黒ぶち眼鏡。その特徴はこの喫茶店に一人しかない人物の物だった。

「おっ、レイちゃんも上がり？ お疲れ様〜」

「うん。山川さんもお疲れ様」

「そのッさん」付けもうやめない？ 同い年なんだからさ」

そう言いながら彼女は私のむき出しの肩に触れた。私の体温よりも格段に冷えた指先に私は驚いて声を上げてしまう。

「いいね〜その反応」

「……私は良くない。びっくりするでしょ」

「ビックリさせたかったの。だってレイちゃんあんまり表情崩さないじゃない？」

山川さんははそう言って不敵に笑った。

確かに私はそこまで表情が豊かな方ではない。けれど、それでこのような仕打ちを受けるのは納得がいかなかった。

「とてもびっくりした。これで満足かな？」

「そんなに怖い顔しないでよ。悪かったからさ」

「……そんなに怖い顔してた？」

お手上げと言わんばかりに両手を挙げる山川さん。それを見て私は右手で顔を覆った。彼女は「良いよ、気にしてない」と応えた。それから私の隣のロッカーのカギを開ける。

「レイちゃんはまだバイト慣れてきた？」

「そうだね。まあ、慣れてきたと思うよ」

「リーダーがいなくても案外なるでしょう？」

「そうだね」と私は頷いた。

仕事は彼がいなくなつて何とかなる。むしろそうなるようになっていないといけないだろう。けれど、私にとってこの場所は、本当の彼と会話できる数少ない場所でもあった。だから少し物足りなさはある。

ロッカーの内側に貼っていたシフト表をなぞった。デジタル版ではないそれは自動で更新されることはない。十月十五日。入江君がシフトに入ることになった日付。そこには代わり映えのない、名前だけ聞いたことがある人達が並んでいる。一

番上の人物に私は斜線を引いていた。

「犬井さん、だったつけ。さっきの人」

「ん？ ああ、そうだね。犬井信二さん。大学生。多分今働いている人の中だったら一番バイト歴が長いベテランだよ」

「あの人が休みになったから、入江君が出ることになったんだよね」

私の計画がずれ始めた原因に触れる。それを解決しない限り、私の望む未来は訪れることはない。だから、この店の事情に詳しい山川さんに話を聞いておきたかった。

「そうだね。まあ、よくあることだよ。都合だのなんだの、それっぽく言ってるけど結局のところ、アルバイトなんて責任感の軽さが売りみたいなどころはあるしね」
「……それは、山川さんが思っているだけなんじゃない？」

「ちよっ、そんなことは……さてはリーダーに情操教育されたな？ 私は続けているだけましな部類だって」

そうなんだ。私はそこまでアルバイトの経験がないから分からなかった。どうやら、世の中にはもっと無責任な人がいっぱい居るらしい。

「けど、どうして犬井さんのことを聞くの？　もしかして、興味あるの？　ああいうのがタイプだったりする？」

山川さんは興味津々に、新しいおもちゃを見つけた子供みたいな表情で私を見た。首を振って「いや」と反応を返す。

「趣味じゃない」

「うわ、即答。犬井さん泣くよ」

「それは嫌だな。面倒そうだし」

「ハハハ」と山川さんは乾いた笑いを漏らす。それから「じゃあ」と前置きして、こちらを見た。一瞬だけ視線が射貫くようなものへ変わる。彼女がそのような目をするのを初めて知った。

「レイちゃんは、どんな人がタイプなの？」

空気が少し冷めた気がした。これはたぶん探りだ。十中八九、私の予想は当たっていたのだろう。彼女は私にとっての障害であることは間違いない。そう確信でき、殺気のようなものがあふれ出ていた。

本来、私は敵対することを望まない。一方的に敵対視することはあっても、気づ

かれて警戒されることは勝率が下がる。だから、〃相手が気付いた時には勝っている〃。そんな状態こそが私の理想だった。

けれど、それは横並びでのスタートだったらの話。山川さんは私の何歩も先にいる。だったら、存在をアピールして、こっちに気を払ってくれた方が勝算はあるはずだ。

それに私はこの場所以外にも彼に接触できる。行動回数では間違いなく有利。ならば、狙うは物量による正面突破しかない。覚悟は決まった。決めるしかなかった。この先にある目的のためにも。

「私は……入江君がタイプだよ。ずつとね」

胸に手を当てて、自信満々にそう答えた。虚勢、ブラフ上等。少しでも警戒心を持ってもらえるように回答を押し付ける。掌はじつとりと湿っていた。

山川さんが目を閉じて、長くため息をつく。眼鏡の下から指を入れて目柱を抑えた。それからもう一度私を見る。

「そっか。奇遇だね。私もなんだ」

不敵な笑み。私の介入なんて意に介してもいらないと言わんばかりのそれに圧倒さ

れそうになる。けれど、その気分だけは表情に出さないように努めた。そうしてしまつたら彼女の圧に負けて飲み込まれてしまうような気がしたから。自分の気持ちを上塗りするために慣れない作り笑いをする。

「山川さんが入江君をそんな風に見てるとは思わなかった」

「そういう風に見せていなかったからね。けれど、これでそうも言っていられなくなった。私たちはお互いの幸せを奪い合うことになる」

「……そうだね」

それは紛れもない事実だ。私たちが望む関係性その席は一つしかない。どちらかは間違ひなくその席には座れない。残酷だけれど、私たちはそれを受け入れざるを得ない。

「でも、その前に停戦協定を結びたい」

「……待ってレイちゃん。なんて？　戦いを吹っかけておいていきなり停戦協定？」

「うん。ちょっと、私だけでは解決できないことがある」

山川さんの琴線に触れたのかむっとした表情を見せた。それからロッカーの中へ

手を伸ばす。ロッカーの扉で表情が隠れて、淡々とした言葉だけが耳に入る。

「そんなの知らないよ。レイちゃんとリーダーとの間にどんな問題があるのかはわからない。でもそれで私が足を止める理由にはならないでしょ？」

「ごもつともだね。でも、今回に限り私たちは手を結べると思うんだ」

「……どうしてそう思うの？」

顔を出して彼女が睨む。眉間に少ししわが寄っていた。彼女の警戒心を解くように、ゆっくりと落ち着いて語りかける。

「十月十五日」

「……リーダーが犬井さんの尻拭いをする日だね。それがどうかしたの？」

「とぼけなくていいよ。私が思いつくんだ。山川さんが思いつかないはずがない。その日に地域の夏祭りがあることは知ってるよね」

「何が言いたいのか？ 回りくどいのは好きじゃないんだよね。私」

「そうだね。単刀直入に言おう」

人差し指で山川さんを指差す。教壇にいる教師の気分をほんの少しだけ味わえた気がした。それから自分の回答を口にする。

「私はね、入江君の休みを取り返したい。それから夏祭りに誘いたいんだ。山川さんだって、そうしたいでしょう?」

「……できるなら、ね。けど、そんな簡単なことじゃない」

「不可能を可能にするための停戦協定だよ。入江君を休みにした後は自由行動。各自好きなように動けばいい。彼と忘れられない一夏の思い出を……ってね。悪くない提案だと思うんだけど」

「どうかな?」と私が山川さんに問うと、長考の後、^{のち}彼女は頷いた。

教えて、バイトリーダー!

著者 イーベル

発行日 2021年4月12日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/251102/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
